関西女子短期大学
鎌田 次郎

The Sense of a Life Worth-living among Contemporary College Students and its Scale

Tsutomu Kondo*¹, Jiro Kamada*²

(*¹Nara Saho Jogakuin College, 806 Rokuyaoncho, Nara 630-8425.

*2Kansai Woman's College, 3-11-1 Asahigaoka, Kashiwara, Osaka 562-0026)

“The sense of a life worth-living” is a term valid for the analysis of adolescence as well as other periods in life, and it has been chosen as a research subject by many researchers. However, there has not been any study which includes making a scale. The present study, therefore, first makes a scale based on a series of researches; i. e. preparatory research by open ended question on “the sense of a life worth-living”, secondary research to confirm the obtained data, and a main research to check the reliability and the validity of the scale drawn. Conclusively, a definition of the sense of a life worth-living is presented. As a result, the 49 types of “the sense of a life worth-living” adopted in the preparatory research was reduced to 42 types. In the main research where questionnaires faithfully prepared from the original were used, the number was further reduced to 31 types after item analysis mainly using factor analysis. At this time, the scale was made from a multidimensional structure of 4 factors. The value of criterion related validity is observed to be high, and a high reliability coefficient is also obtained by the test-retest method and the α coefficient. Drawn from the above results, the scale on “the sense of a life worth-living” consisting of 31 types has face validity, content validity, factor validity and criterion-related validity, hence it is a reliable scale. According to the present scale, “the definition of the sense of a life worth-living” among college students is that they are aware of the value of their existence, satisfied with the present situation and have a will to live. However, they also seem to believe that enjoying life also has the sense of a life worth-living.

Keywords: sense of a life worth-living, factor analysis, reliability, validity, definition

I 問題提起と目的

生きがい感という言葉は老年期においてよく使われるが（近藤，1997）、実際は自我の確立する青年期より成立する概念であろう。そのことは藤原・依田・大西・斎藤・津留・西平・宮川（1972）、井上・柏木・古沢（1975）、吉田・平井・長島（1979）など多くの著書において論議されていることから分る。した

がってその概念について青年期の若者を対象になされた調査も数多くある。代表的なものは総務庁青少年対策本部（1991）による調査である。これは5年ごとに行われるため、生きがい意識の動向をつかむ貴重な資料となっている。しかしながら生きがいを感じる時の状況が最初から 1. 社会のために役立つことをしている時、2. 仕事に打ち込んでいる時、3. 勉強に打ち込んでいる時、4. スポーツや趣味に打ち込んでいる時、5. 家族という時、6. 友人や仲間という時、

7. 親しい異性という時、8. 他人にわずらわされず一人である時、のように8通りに設定されているため、それ以外の自由な発想を得ることはできない。また、見田（1967）によって行われた全国青壮年意識調査を初めとして新聞社等による生きがい調査も行われているが、いずれも同様である。

しかしこのような生きがい感調査に含まれる調査項目は、どのような根拠によって選択されているのであろうか。調査が行われる限り、それ以前に「生きがい感とは何か」という概念定義についての合意が必要である。これまでの生きがい感の概念は、臨床家が自らの臨床経験にもとづいて論じたもの（小川，1982）であったり、諸家がそれぞれの理論にもとづいて構成してきたもの（西平，1979；宮城，1971）であると思われる。それぞれについては貴重な体験や理論としての歴史的な重みがあり軽々しく論駁できるものではないと思われるが、生きがい感のとらえ方についての一般に対する意識調査をもとにしたものでない限り、その生きがい感概念については思弁的で特定の価値観が混入しているのではないかという疑念や批判はどうしても免れ得ないのである。たとえば、青年期をも対象とした生きがい感スケールとして P. I. L (Purpose in life) という実存心理検査がある。これは実存分析の Frankl. V. E が臨床面で用いていたテストを Crumbaugh and Maholick (1964) が標準化したテストである。これはその名の通り人生の目的テストであるが、これを日本に紹介した岡堂（1993）は人生の意味と目的は正に日本の生きがい感であると論断し、これを生きがい感スケールと称したのである（P. 23）。しかしその質問20項目を見ると単なる性格特性や死生観を尋ねたものなど生きがい感とは直接的に無関係と思える項目がある。それに何よりもこの人生の目的意識が生きがい感であるとの検証が調査によって明らかにされていない。そうである以上、生きがい感概念についてのその定義は恣意的であり、そのスケールもまた恣意的なものとならないのであろうか。

一般の人々が生きがい感をどのようにとらえているかについては、「どんなときに生きがいを感じるか」を問う自由記述式調査を実施するのが適切ではないかと思われる。これまでに行われた自由記述式調査とし

ては、佐藤・田中（1971）による大学生を対象としたものがある。その調査結果を見るとやはり8つの分類では整理しきれない生きがい感（過程—充実としては、合唱している時、経験としては、クラブサークル活動している時、対人関係としては、人から頼られる時、他人とうまくいく時、他人から認められる時、恋愛している時）が見出されている。そしてその結果をもとに生きがい感とは「価値ある目標に向かって努力していく過程で感じる充実感、あるいは「目的を達成した時の満足感、それに伴う生の実感、喜び」と定義されている。これは貴重な資料であると思われるが、その結果をもとに結論づけられた概念定義は、研究者が恣意的に集約し導き出したもので終わっており、この定義を再検証するための調査がおこなわれていない。これを検証するためには、結論づけられた生きがい感定義の適否を直接問う方法も考えられるが、一般の意識調査の質問内容としてはかなり抽象的な問いとなり回答に困難が予想される。したがって、自由記述式調査の結果、「どんなときに生きがいを感じるか」について得られた項目を再調査によって取捨選択し、そこからスケールを作成し、そのスケールを用いた調査によって項目分析をおこない妥当性を高める手続きを経てスケールを完成し、そのスケールの因子構造をもとに概念定義をおこなうことが適当であろうと思われる。また今日に至るも自由記述でなされた調査がそのままスケール作成にまでつながった研究はなされていない。

そこで本研究では、生きがい感とは何かについて最初にあって規定することなく、自由記述式調査によって「どんな時に生きがいを感じるか」についての第一次予備調査を行う。次に個々の人から得られた項目がどの程度生きがい感として支持されるかどうかを調べる第2次予備調査をおこなう。そしてその結果をもとにスケールを作成し、そのスケールの信頼性・妥当性を問うための本調査をおこなうこととする。従って本論においては、現代大学生にとっての生きがい感についての概念定義を、そのスケールの因子構造が明らかになった後におこなう方針とする。

II 第1次予備調査

方 法

調査対象

K大学生110名(男性56名、女性54名)平均年齢20.55才($SD=1.09$)

調査時期

1996年1月中旬

調査内容

あなたは生きがい感とは、どのようなものだとお考えになりますか、あなたはどのような時に生きがいを感じますか、又は感じましたか、以上の設問形式で自由記述による回答を求めた。

結果と考察

110名からは283通りの生きがい感の記述が見られたが、記述が特殊なもの、例えば大学入試のため勉強していた時、対抗試合に勝つために練習している時、また会計士を目指して勉強している時などの場合は目的があり達成したいことがある時という抽象的表現の文と同一と考え一つにまとめた。また類似の記述も1つに集約していったが、この作業は3名の研究者でもって行われた(近藤・鎌田, 1996a)。その結果49通りの生きがいの感じる状況が表された(その項目内容については第2次予備調査の結果; Table 1 参照)がその中には「好きな異性に愛されている時」「風呂に入っ
てよい心持ちがした時」「好きな物を食べたり飲んだりする時」さらに「性的快感を味わう時」と言うものもあり、実にユニークな生きがい感が見られた。従来特に生理的快感とも思えるものは生きがい感には入らないと神谷(1980)、白石(1986)、野田(1983)、小川(1982)らによって述べられている。また社会的価値に適合しないもの、反するものは生きがい感に入らないと返田(1981)、上田(1990)、梶田(1990)、小林(1989)、鈴木(1983)らによって主張されている。しかしまた一方井上・長嶋(1980)は生きがい感
は社会的価値基準や善悪の判断を越えていると述べており、本明(1972)も「生きがいには歪みもあり合理的でない場合もある。主観性は当然である」と述べている。

このように生きがい感というものが本来主観である以上生理的快感である場合もあり、社会的価値とは合致しない場合もあろう(近藤, 1997)従って本論ではこのような価値観は入れず実態調査から得られた生理的快感を含む項目も取上げることとした。

III 第2次予備調査

目 的

第1次予備調査(自由記述式調査)によって得られた49通りの生きがい感が特定の人だけの特殊なものか、一般的に適用できるものなのか、その確認の調査を行う事とする。

方 法

調査対象

K大学生160名(男性71名、女性89名)平均年齢19.59才($SD=1.32$)

調査時期

1996年6月上旬

調査内容

自由記述による全ての文章の後にそのまま、「～の時この気持は生きがい感になるか?」の設問を付け加えた形式に置きかえ、49の質問項目を作成した。回答は、はい、どちらでもない、いいえの3件法で求めた。得点化 3件法の為、1、0、-1と配点、項目得点の合計が0以上の項目を採用した。

結果と考察

Table 1 左の部分のごとく49の質問項目の内、結局合計点が0以上となる点線から上の42項目が採用された。また点線から下の不採用となった残りの7項目の内「性的快感を味わう時」や「風呂に入った時の気分」「悩んでいる時」などは特殊な生きがい感であり、一般的な生きがい感からは遠いと判断されたようである。(近藤・鎌田, 1996b)

近藤・鎌田：現代大学生の生きがい感とスケール作成

Table 1 第2次予備調査結果による生きがい感の得点順位と本調査結果による得点別回答率(%)

第2次予備調査結果		項目内容 (第1次予備調査結果)	本調査結果			
順位	合計点		項目	はい	どちらでもない	いいえ
1	137	夢中になって好きなことが出来る時	17	64.9	22.6	12.5
2	136	自分の趣味や好きなことに出会えた時	11	56.73	31.25	12.02
3	135	努力した結果報われたと感じる時	30	57.69	28.37	13.94
4	131	自分が必要とされ、存在価値を感じる時	1	50.96	34.62	14.42
5	130	目的があり達成したいことがある時	6	70.19	17.31	12.5
6	122	自分の能力が発揮出来る時	13	12.98	49.52	37.5
7	117	物事にやる気を持っている時	3	49.04	39.42	11.54
8	117	やり甲斐のあることをしている時	26	42.79	35.1	22.12
9	117	将来に希望を持っている時	9	63.94	25.0	11.06
10	112	毎日が充実していると思う時	20	39.9	41.35	18.75
11	112	周囲から認めて貰っていると感じる時	25	31.73	55.77	12.5
12	107	好きな異性から愛されている時	21	22.12	12.98	64.9
13	107	幸せを感じる時	37	38.94	46.63	14.42
14	102	皆で力を合わせ目的を達成した時	39	35.1	37.5	27.4
15	96	何事に対しても積極的に取組んでいこうと思っている時	31	57.21	29.33	13.46
16	94	向上しようと心掛けている時	4	67.31	24.04	8.65
17	92	私は他人から信頼され頼りにされていると感じる時	24	22.6	59.62	17.79
18	92	自分の人生に大きな期待を持っている時	18	50.48	35.1	14.42
19	84	人のために役立ったと思う時	28	50.48	31.73	17.79
20	82	生活に満足している時	34	44.71	36.54	18.75
21	76	他人が喜んでくれることをした時	16	35.58	50.48	13.94
22	76	小さなことでも感動した時	2	72.6	16.35	11.06
23	75	自分が高く評価された時	19	22.12	45.67	32.21
24	71	今日は一日好きな事が出来ると云う楽しい期待の持てる時	42	37.02	28.85	34.13
25	70	人間的に成長したと感じる時	8	55.75	28.85	15.38
26	65	全ての物ごとが順調に進んでいる時	41	18.27	40.87	40.87
27	49	世界がバラ色に輝いて見える時	29	23.08	34.13	42.79
28	43	好きな物を食べたり、飲んだりする機会が持てる時	15	66.83	19.71	13.46
29	42	フカフカの布団でねられる時	7	66.35	17.31	16.35
30	38	晴れた日の晴れやかな気分の時	32	45.67	35.1	19.23
31	38	毎日が平和で楽しいと感じる時	40	38.94	40.87	20.19
32	38	暖かい日差しの中で昼寝が出来る時	14	30.29	26.44	43.27
33	35	楽しい会話をする時	10	65.38	27.4	7.21
34	35	まわりの人達とうまくやっている時	22	68.27	28.37	3.37
35	35	好きな歌や音楽を聞いている時	23	80.29	12.5	7.21
36	33	家族や他人に対し深い思いやりを持っている時	35	52.88	37.98	9.13
37	32	私は今迄知らなかった新しい自分を発見する時	36	43.27	33.17	23.56
38	21	課せられた役割を果たしている時	33	44.71	37.98	17.31
39	18	のんびり、リラックス出来る時	5	72.12	15.87	12.02
40	13	雄大な景色を眺めている時	12	67.79	20.67	11.54
41	3	スポーツを観戦したり、又自らもする時	27	65.38	18.75	15.87
42	0	心ゆく迄買物をした時	38	36.06	16.83	47.12
43	-12	性的快感を味わう時				
44	-14	風呂に入ってよい心持がした時				
45	-19	まわりが自分中心にうまく回っていると思う時				
46	-32	早く明日が来て欲しいと思う時				
47	-83	眠たくてうとうとしている時				
48	-91	悲しみに出会った時				
49	-108	悩んでいる時				

IV 本調査

目 的

42項目によって構成される生きがい感スケールをもとに信頼性と妥当性を持つスケールであるか否かを項目分析を行いながら検証する事とする。

方 法

調査対象者

K大学生208名（男性102名、女性106名）平均年齢18.76才（ $SD=1.14$ ）

調査時期

1996年7月上旬

調査内容

第2次予備調査の結果得られた42項目の内容をできるだけ原文に忠実に質問形式に変え（Table 2 の項目内容参照）はい、どちらでもない、いいえの3件法により回答を求めた。またスケールの基準関連妥当性検証の基準値に使用するため「あなたは生きがい感をどの程度感じていますか」というセルフアンカリングスケールでの回答（0～10点）を同時に求めた。

得点化 3件法の回答は3、2、1と配点

結果と考察

得点通過率による項目分析

2件法の場合、はい、いいえの回答比率が80%以上、20%以下を除外の目安にすると塩見・千原・岸本（1991）によって示されているが、3件法の場合はもう少しゆるやかな通過率になると考えられる。そこで残された項目中には因子的妥当性の高い項目が含まれている可能性を考え、90%以上10%以下を除外することとし Table 1 右の部分のごとく、90%以上の項目はなかったため、いいえが10%以下の5項目（項目番号4、10、22、23、35）を弁別性の悪い項目として減らし、37項目とした。

因子的妥当性

因子分析による因子的妥当性の検証を行うこととする。37項目の下位項目を持つこの尺度は生きがい感と

いう一つの変量を測定するために作成されたものとみなされるので、直交解ではなく各因子が相関を持つ斜交解による分析を行うこととした。主因子法により固有値が1以上の因子を選択したところ、固有値のスクリーが第5因子から始まっており、またオプティミム回転を行ったところ、4因子の場合がもっとも各因子の特徴を説明出来るため、因子数を4とした。累積寄与率は35.1%となった。ただ因子負荷量が0.3以下及び共通性が0.2以下の項目が計6項目あり、共に尺度構成にとって不適切と考えられるためこれを減らし、残り31項目でもって改めて因子分析を行った。

その結果について主因子法により固有値が1以上の7因子が選択されたが、オプティミム回転を行ったところ適切な解は得られなかった。そこで固有値のスクリーが第5因子から始まっていること、オプティミム回転を行ったところ4因子の場合が Table 2 のようにさらに各因子の特徴を説明できることから4因子とした。

第1因子は「私は今の生活に満足感があります」、「私は今幸せを感じています」などから「現状満足感」と名付け、第2因子は「私は好きな物を飲んだり食べたりする機会をよく持っています」、「私は心ゆくまで買い物をすることがあります」などから「人生享楽」因子、第3因子は「自分が必要とされ存在価値を感じるがあります」、「人のために役に立ったと感じるがあります」、「私は周囲から認めて貰っています」などの項目内容から「存在価値」、また第4因子は「私は物ごとにやる気を持っています」、「私は何ごとに対しても積極的に取組んでいこうと思っています」などの内容から「意欲」因子と名付けられた。さらに因子間相関（Table 3）を見ると、第3の「存在価値」因子と第4の「意欲」因子とは0.51と高い相関値を示しているが、これは意欲因子の設問には対象に対する目的性が感じられ、そのことが目的達成による存在価値を認めさせることと関連したのであろうと考えられる。それに対し第2の「人生享楽」因子と第4の「意欲」因子とは0.09と大変低い相関値を示している。これは「人生享楽」因子の設問には刹那的内容がほとんどであるため「意欲」との関連が低くなったと考えられる。またこの「人生享楽」因子は「存在価値」や「現状満足感」因子とも相関値が低い、その

近藤・鎌田：現代大学生の生きがい感とスケール作成

Table 2 31 項目因子分析、主因子法（オブリミン回転）の効果
パターンマトリックス

設 問 番 号	項 目 内 容	第 1 因 子	第 2 因 子	第 3 因 子	第 4 因 子	共 通 性
34	私は今の生活に満足感があります	.64585	.00186	.07392	.17069	.58326
40	毎日が平和で楽しいと感じています	.53826	.18449	.10165	.08888	.47885
37	私は今幸せを感じています	.52365	.10320	.15444	.13789	.49770
20	私の毎日は充実していると思います	.52323	.02968	.16129	.25872	.58589
41	全ての物ごとが順調に進んでいると思っています	.49992	.18959	.18651	-.02288	.43605
14	暖かい日差しの中でよく昼寝を楽しみます	-.09453	.49082	-.04166	-.07238	.23383
7	私はフカフカの布団で寝ることをよく楽しんでます	.07363	.46284	.00511	-.06925	.22821
15	私は好きな物を飲んだり食べたりする機会をよく持っています	.21710	.43791	-.08790	.18231	.30573
38	私は心ゆく迄買物をすることがあります	.27732	.38695	.17633	-.15737	.28593
29	世界がバラ色に輝いて見えることがあります	.11922	.38587	.03037	.27088	.31463
42	今日は一日好きなことが出来ると思う日がよくあります	.11102	.31248	.15531	.07616	.21455
24	私は他人から信頼され頼りにされています	.16217	-.06060	.67977	.01735	.57061
16	私の行為で人に喜んで貰えることがよくあります	-.01529	.08870	.67879	.05707	.53490
1	自分が必要とされ存在価値を感じることがあります	-.00521	-.01478	.63040	.04807	.42333
39	皆で力を合わせ目的を達成することがよくあります	.16725	.05445	.62525	-.13782	.44002
28	人の為に役に立ったと感じることがあります	.00302	.08736	.57509	.01683	.37670
19	自分は高く評価されたと思えることがよくあります	-.02926	-.03865	.55787	.10716	.35946
33	私は課せられた役割をよく果たしています	.10676	-.20490	.48384	.02887	.28593
8	私は人間的に成長したと感じることがあります	-.19298	.13414	.47473	.20225	.34711
25	私は周囲から認めて貰っています	.34978	-.01716	.44474	.00983	.44744
36	私は今迄知らなかった新しい自分を発見することがあります	-.25893	.34260	.35773	.09697	.30268
30	努力した結果報われたと感じることがよくあります	.19368	-.03768	.34704	.24341	.38276
9	私は将来に希望を持っています	.00748	.17512	-.05719	.75237	.57971
18	自分の人生に大きな期待を持っています	-.00415	.11445	.01087	.70023	.52495
3	私は物事にやる気を持っています	.02980	-.12560	.13898	.60982	.48651
6	私には目的があり、達成したいことがあります	-.07940	-.14610	.02942	.58135	.33482
31	私は何事に対しても積極的に取り組んでいこうと思っています	.11603	.01774	.19516	.41475	.36412
26	今や甲斐のあることをしています	.10930	-.04788	.11908	.40968	.28063
17	夢中になって好きなことをしていることがよくあります	.26620	-.03374	.07682	.35476	.30942
13	私は現在自分の能力を精一杯発揮しています	.24289	-.00523	.13427	.34879	.33311
11	自分の趣味や好きなことに会えることがよくあります	.28544	-.01029	-.00836	.31847	.24213
固 有 値		9.09720	2.14253	1.74846	1.54239	
因 子 寄 与 率		27.5	4.8	3.8	3.0	累積寄与率 39.1

Table 3 因子間相関 マトリックス

	F 1（現状満足感）	F 2（人生享楽）	F 3（存在価値）
F 1（現状満足感）	1.00000		
F 2（人生享楽）	.18066	1.00000	
F 3（存在価値）	.18066	.26140	1.00000
F 4（意欲）	.35954	.09492	.51475

ことはこの因子が他の3因子からは独立した位置にあることを示しているといえる。

ここで項目得点と項目合計点との相関値を検討してみる。

その積率相関値は各項目共 0.4~0.7の相関値を示す中で、項目（7）と（14）の相関値が 0.3を切っていることが分かった。そのため（7）と（14）を外し、29

項目でもって改めて分析し直すのも一法であるが、その作業を繰返すと第2因子を構成する項目がなくなってしまう恐れも出てくる。しかしこの（7）と（14）の項目の属する人生享楽因子は生きがい感にとって無視し得ない因子と考えられるためあえて項目合計点との相関値の低いことは看過することとし、生きがい感スケールはやはり4因子構造による31項目とする。

Table 4 31 項目尺度得点の基本統計量

	N	平均	標準偏差	最大	最小
全体	208	68.952	11.856	93	35
男	102	66.265	12.428	93	35
女	106	71.538	10.714	92	45

Table 5 セルフアンカリング尺度得点の基本統計量

	N	平均	標準偏差	最大	最小
全体	208	6.236	1.872	10	0
男	102	6.049	2.036	10	0
女	106	6.4158	1.690	10	1

Figure 1 31 項目スケール得点頻度分布

Figure 2 セルフアンカリングスケール得点分布

基本統計量

31項目スケール及びセルフアンカリングスケール得点の基本統計量は Table 4,5の通りであった。

さらに31項目得点及びセルフアンカリング得点の人数による分布を Figure 1,2に示す。

ここで4因子による項目の平均点とテスト得点との積率相関値を比較し生きがい感との関連を調べてみる。因子得点を使用することも考えられるが標本数が 208 では誤差が大きくなる可能性が考えられるため、各因子に含まれる項目の平均点を使用することとした。

結果は Table 6 のごとく、存在価値因子、現状満足感因子、意欲因子、人生享楽因子の順位で関連を持つことが分った。

Table 6 テスト得点と因子項目平均得点との相関

因 子	積率相関値
第 3 因子 (存在価値)	0. 87390
第 1 因子 (現状満足感)	0. 81576
第 4 因子 (意欲)	0. 81443
第 2 因子 (人生享楽)	0. 61551

基準関連妥当性

セルフアンカリングスケール（以下セ・スケールと称す）による得点を外部基準とした積率相関値は 0. 8669 ($df=206$, $t=24.9604$) と高い相関値を示した。現在大学生あるいは青年層を対象とした生きがい感スケールは存在していない。確かに大野 (1980) によって大学生の充実感を計るスケールが生きがい感スケールと同義的なものと扱われたり、また先述のように P. I. L スケールを岡堂 (1993) や山幡 (1991) が生きがい感スケールとして使用している例はある。しかし例えばこの、P. I. L にしても人生の目的感が生きがい感であると言うことを実証した研究がなされていないためその様なスケール得点は外部基準にはなり得ない。従って併存的妥当性の基準値としては今回セ・スケール得点に求めた。この得点は生きがい感の程度を一言でもって尋ねることが出来るため、同じく生きがい感の程度を主観的判断による31項目の累計をもって尋ねたスケールの妥当性の検証としてはもっとも適切であり、簡便な方法である。その結果31項目得点の累計が生きがい感の程度を表わすことが検証されたといえる。また同時にこのスケールがセ・スケールでは分り得ない生きがい感の内容をかなりの程度知ることのできるスケールであることになる。そしてこの検

Table 7 再検査法における元検査データと再検査データの基本統計量

	3 1 項目		セルフアンカリング	
	元検査	再検査	元検査	再検査
人数	52	52	52	52
最大	92	92	10	10
最小	54	51	2	3
平均	74. 981	75. 615	7. 269	7. 231
標準偏差	8. 670	8. 767	1. 521	1. 527

Table 8 再検査法における元検査データと再検査データとの相関

3 1 項目	セルフアンカリング
0. 97526	0. 97548

証によって結果的に生きがい感の大きい人は31項目の累計点が大きいため生きがい感の各因子（意欲や享樂的気分、存在価値や現状満足感など）のバラエティにも富んだ人である可能性が高いと考えられる。また、Cantril (1965) の作ったセ・スケールは、信頼性が計られていないため本論では再検査法による信頼性の検証を同時に求めることとする。

再検査法による信頼性の検証

1. 目的

31項目スケールが信頼性を持つかどうかについて再検査法に基づいて検証する。なおセ・スケールもあわせて検証する。

2. 方法

調査対象者；K大学生208名の内、等間隔ランダムサンプリングにより60名を選び出し、郵送にて回答を求めた。回答数、有効回答共52名（男性25名、女性27名）

調査時期；1996年9月上旬（初回調査より2ヶ月の間隔）

3. 結果

再検査法結果による両者の基本統計量と相関値は、Table 7 と Table 8 の通りであるが、いずれも非常に高い信頼性推定値が得られた。

α 係数による信頼性の検証

α 係数は0.9085と非常に高い信頼性推定値が得られた。

V 結 論

以上の結果から大学生を対象とした31項目による生きがい感スケールは自由記述から求めた生きがい感の内容をそのまま質問項目の内容としているため表面的、内容的妥当性があり、また因子的妥当性もある。さらに基準関連妥当性も高く、信頼性も極めて高い尺度であると言える。ただ地域差など、何らかの特性の異なる大学生でも同様の因子が抽出されるのか、同様の妥当性が確認されるのかどうかと言った交差妥当性に対する研究がさらに必要とされよう。また、今後はこ

のスケールを用いて現代大学生の生きがい感に影響する背景要因を探ると言った研究が指向されよう。最後に4因子の項目の平均点とテスト得点との相関値をもとに生きがい感の定義づけを行う。

現代大学生の生きがい感とは自らの存在価値を意識し、現状に満足し、生きる意欲を持つ過程で感じられるものであるが、人生を楽しむ場合にも感じられることがあると分かった。佐藤・田中（1971）による定義は、価値ある目標に向かって努力する過程で感じるもの、目的を達成した時の充実感であるとされて来たが、現代の大学生はそれだけでなく生活の満足や人生享樂をも重視することが生きがい感につながると考えていることを示唆する結果となった。

この享樂的なものが生きがい感として取らえられているという結果は、現代の若者が社会から期待される生き方や価値観にとらわれず、現在を自由に主体的に喜びを味わって生きることにとめらいを感じなくなっていることの現れであろうと思われる。

本論では、大学生に対する自由記述式調査から出発して、生きがい感スケールを作成した。またそこから、若者の生きがい感についてのとらえ方を得て、生きがい感の概念定義を試みた。その結果、自らの存在価値、現状満足感、生きる意欲などの説明概念は、従来の諸説（斎藤，1995；上田，1990；二宮，1994）と類似する部分があったが、特に享樂因子は従来にない説明概念であると思われる。若者が生きがい感をこのようにとらえている以上、その因子を含んだスケールこそ、標準的なスケールになり得ると思われる。そして望ましい生きがい感とはどのようなものであるかについての論議は本論のような若者の現状を提示した資料によって初めて行われるものと思われる。

引用文献

- Crumbaugh, J. C. & Maholick, L. T. 1964 An Experimental Study in Existentialism; The Psychometric Approach to Frankl's Concept of Noogenic Neurosis. *Journal of Clinical Psychology* 20, 200-207.
- Cantril, H 1965 *The Pattern of Human Concerns* New brunswick, New Jersey; Rutgers University Press 22-23.

近藤・鎌田：現代大学生の生きがい感とスケール作成

- 藤原喜悦・依田 新・大西誠一郎・斎藤耕二・津留 宏・西平直喜・宮川知彰 1972 現代青年の生きがい・現代青少年心理学講座7 金子書房 57-102.
- 井上健治・柏木恵子・古沢頼雄 1975 青年心理学 有斐閣 119-132.
- 井上勝也・長嶋紀一 1980 老年心理学 朝倉書房 13-14.
- 見田宗介 1967 現代の青年像 講談社 116.
- 神谷美恵子 1980 生きがいについて みすず書房 23.
- 梶田叡一 1990 生き方の選択と生きがい・生きざま 現代のエスプリ 281 至文堂 162.
- 小林 司 1989 生きがいとは何か―自己実現のみち 日本放送出版協会 26-30.
- 近藤 勉 1997 生甲斐感への一考察 発達人間学研究 6, 11-20.
- 近藤 勉・鎌田次郎 1996 a 青年期の生甲斐感 日本心理学会第60回発表論文集 298.
- 近藤 勉・鎌田次郎 1996 b 現代大学生の生甲斐感とそのスケール 日本青年心理学会第4回発表論文集 51-52.
- 本明 寛 1972 新態度の人間―生きがいの心理学 ダイアモンド社 125.
- 宮城音弥 1971 日本人の生きがい 朝日新聞社 10.
- 西平直喜 1979 青年期における発達の特徴と教育 岩波書店
- 二宮厚美 1994 生きがい構造と人間発達 労働旬報社 33.
- 野田陽子 1983 老年期の生きがい特性 老年社会科学 5, 114-128.
- 大野 久 1980 現代青年の充実感に関する研究1 日本教育心理学会 第22回大会発表論文集 548-549.
- 小川 猛 1982 実践老人心理学 黎明書房 65.
- 岡堂哲雄 監修 PIL 研究会編 1993 生きがい 河出書房新社 1-23.
- 斎藤茂太 1995 生きがい研究 長寿社会開発センター 7.
- 総務庁青少年対策本部 1991 現代の青少年 140-142.
- 佐藤文子・田中弘子 1971 「生きがい」の心理学的研究の試み1 日本心理学会第35回大会発表論文集 509-512.
- 鈴木 広 1983 生きがいの探究 九州大学出版会 323.
- 白石浩一 1986 夫と妻の生きがい学 海竜社 210.
- 返田 健 1981 生きがいの探求 大日本図書 42.
- 塩見邦雄・千原孝司・岸本陽一 1991 心理検査法 ナカニシヤ出版 84.
- 上田吉一 1990 マスローによる自己実現 現代のエスプリ 281 至文堂 121.
- 山幡信子 1991 生きがい感に関する研究 日本心理学会第55回発表論文集 492.
- 吉田裕・平井久・長島正編 1979 現代青年の意識と行動 誠信書房 103-114.

謝辞

本論文作成にあたり貴重なご助言を賜りました、元関西大学教授辻岡美延先生、神戸大学発達科学部講師佐藤有耕先生に心から感謝を申し上げます。

(1997.10.9受稿, 1998.5.7受理)